

「第三の категория 研究の種を発掘するための調査研究」プロジェクトへの

協力助成趣意書

我が国において科学者（自然科学のみならず人文・社会科学を含む。）が得る研究資金には、

- ① 文部科学省の科学研究費など各省の研究費制度による国の研究費（これによる研究を「第一カテゴリーの研究」と呼ぶ。）
- ② 産学共同研究や委託研究など産業界の支援（これによる研究を「第二カテゴリーの研究」と呼ぶ。）

がある。

これらによる研究は出資者の意向に沿うことが義務付けられており、しかも、我が国においては、特に、すぐ役に立つ成果が求められている。また、「第一カテゴリーの研究」はこれまでの科学の展開の中で確立されてきた分野を中心に助成がなされ、「第二カテゴリーの研究」は明確な目的を達成するために、実証された科学の成果を用いることが多い。このため、研究は所定の枠内でしか行えず、この枠から外れた「純粋な好奇心」に基づく研究（第三カテゴリーの研究）は研究費を獲得できない現状がある。

しかし、人類にとっての普遍で不変の財宝である科学の知識体系は「純粋な好奇心」によって生み出されてきたものであることを考えると、これら「第三カテゴリーの研究」の助成をすることが極めて重要である。

①、②とは異なる研究資金として助成財団による研究助成がある。これは、財団の設立趣旨に則った助成であり、①と類似している。しかし、大枠は決まっても財団が固有の思想をもって自律的に課題を定めて助成している点が、①とは大きく異なる。つまり、助成財団は第三カテゴリーの研究が大枠で財団の設立趣旨に則っていれば、その研究に対し助成できる余地がありそうである。そこで、助成財団等の関係者によって組織された「協力助成計画会議準備会」では、助成財団による新しい助成の仕組みをつくるための検討を続けてきた。

「第三の категория 研究の種」については、公益財団法人日本学術協力財団に設置された「科学と社会研究会」において発掘する努力を行ってきた。これまでの検討により、その候補としては、（1）「近代発展規範（民主主義・市場原理・科学的論理思考）の揺らぎの本質の解明 一近代社会規範の再構築を求めて一」や（2）「科学・技術が関与する課題解決の活動サイクルが進展するための組織構築の在り方を探る：認知症を対象として」などが挙げられている。

これらの候補は、現段階では科学研究費や研究助成財団の研究費の応募できるレベルまで具体化されていないものが多い。このため、日本学術協力財団では、3か年計画で「種」の候補について課題探索研究を行い、本格研究として研究助成に応募できるレベルまで具体化させることを目的とする「第三のカテゴリー研究の種を発掘するための調査研究」プロジェクトを計画している。令和二年度においては、(1)と(2)について分科会を設け、課題探索研究を行うこととしている。

このような活動を通じ、第三カテゴリーの研究に対する理解が深まり、各助成財団によって積極的な支援が行われるようになるとともに、将来的には国の研究助成制度によって第三カテゴリーの研究に対する支援が行われるようになり、「人類にとっての普遍で不変な財宝である知識体系」の蓄積に寄与することが期待される。

このような状況の下で、我が国の科学(自然科学のみならず人文・社会科学も含む。)の発展支援を目的として設立された助成財団が「科学と社会研究会」と力を合わせ、将来の学術の発展に寄与していくことを目的とし、本プロジェクトへの助成について協力を呼びかけるものである。

なお、本件寄付対象事業に係る活動内容及び決算については、毎年寄付者に報告することとする。

令和二年一月

公益財団法人日本学術協力財団